

新報

島根県教育庁
隠岐教育事務所
隠岐県隠岐郡志保町
電話2-9772

夢仕事

「今日、初めて挨拶を返してくれましたよ。」

学校訪問で、廊下を歩いていたときのことです。ある先生が、特別支援学級の担任の先生に嬉しそうに話しかけておられました。挨拶を返した子どもは、近くにいて、担任の先生から「やったね。」と声をかけてもらい、その言葉を背中であらわしながら階段を上がっていききました。後で話を聞くと、入学してからこの日まで挨拶が返ってきたことはなかったそうです。

「おはよう。」

周りから見れば、たった一言の挨拶かもしれませんが、その一言の裏には先生方の積み重ねた時間や思いがあります。

す。すぐに変化は見えなくても、声を掛け続ける。気が掛け続ける。悶わり続ける。そうした営みはその子に届いた瞬間だったように思います。

先日、愛媛大学の平松義樹先生の講義を受ける機会がありました。その中で心に残ったのが、「てまひまをかける」という言葉です。平松先生は、子供の生きる根っこを育て、子供の育つ環境を整える大切さを畑仕事に例えて話されていました。種をまいても、すぐに芽が出るわけではありませぬ。土を耕し、肥しをまき、水をやり、その育ちを信じて待つ。教育も同じことが言えるのだと思います。どれだけ時代が変わっても教育の出発点は、目の前の子供です。今できないことがあってもいい。上手くいかなく

てもいい。回り道をしてもいい。そうした経験も含めて、一人ひとりが自分らしく幸せに生きていくために、今何が必要なのかを考えながら支えていく。

今は、働きやすさが求められる時代です。それは、とても大切なことですが、最後に私達を支えるのは「働きがい」です。子供の小さな成長を一緒に喜べることに。心が通じたいと感ぜられる一瞬に出会えること。子供の可能性にわくわくできること。自分の関わりが誰かの力になるかもしれないと思えること。そこには、教師という仕事ならではの喜びや誇りがあります。

学校訪問や研修をとおして出会う先生方から、私は日々そのことを教えていただいています。

(池田)



やさしい「どうして?」

先日、ある研修会で、今年、私が最も大切にしたい言葉に出会いました。

「子供の気になる行動に對して、いきなり支援の方法を決めるのではなく、やさしい『どうして?』のまなざしを向けてみたい。」

(青山新吾氏より)

青山先生がこの言葉を発することになったきっかけとなる、ある学生の言葉があります。

「青山先生の言う『どうして?』は、私が親に言われ続けてきて、すごく嫌だった『どうして?』ができないの?』という相手を問い詰める『どうして?』とは違って、やさしい『どうして?』ですね。」

研修会を通して、私自身が使ってきた「どうして?」は、どちらの「どうして?」だったのだろうか

。ふと振り返るきっかけとなりました。

私たちは日々、目の前の忙しさに追われると、子供の行動に對して「どう対応するか」という「方法の選択」を急いでしまいがちです。しかし、本当に必要なのは、その子の内側にある困りごとこそっと寄り添う「問い」ではないでしょうか。

今年度、隠岐教育事務所所では「ユニバーサルデザイン」の視点を取り入れた授業づくりを重点項目の一つに掲げています。

第二期しまねの学力育成推進プラン令和八年度重点アクションでも「誰もが学びやすい環境づくりや「学びのオプション(選択股)の用意」が推進されています。これらを単なる「技術」に終わらせない鍵が、まさにこの言葉にあります。

学校訪問で先生方のたくさんの工夫を目にした。すっきりと整えられた教室、黒板の隅に書かれた授業の流れ―

その先生方のすべての工夫の裏には、すでにこのやさしい「どうして?」のまなざしが息づいています。

「注意が散りやすい子が、少しでも集中できるように、環境を整理しよう」「先の見通しが持てず、不安な子が安心して授業に挑めるようにしよう」形だけのユニバーサルデザインではなく、心が通ったユニバーサルデザイン。これこそが、私たちが目指す教育の核ではないでしょうか。

今年度の学校訪問では、先生方が教室の中で灯しているやさしい「どうして?」の瞬間を、一つでも多く見つけ、応援していきたいと考えています。そのまなざしが広がることで、隠岐の子供たちの「学びやすさ」へとつながることを願っています。

(広兼)

